

飛鳥資料館のみどころ（10）

展示品解説 その2 「須弥山石」

飛鳥資料館は前回紹介した石人像に加えて、もう一つ、石造物を展示しています。それが円形の石を3つ重ね、全面に山並みを浮き彫った須弥山石（重要文化財）です。

文様と内部構造から、現状の下から第1石と第2石の間にも同様の石があったことを想定でき、これらを積み上げると高さ3.4mほどに復原できます。石の内側はくりぬかれており、第1石の下面に穿たれた細い円孔から、サイホンの原理により内部に水をため、第1石の側面ケ所の穴から噴き出させる噴水施設と考えられています。

明治35年(1902)に飛鳥寺の北西の水田(現石神遺跡)で発見されたこの石造物については、その発見当初からさまざまな議論がありましたが、後の発掘調査により、石神遺跡が飛鳥時代の迎賓館と想定され、推古朝に1度、斉明朝に3度、『日本書紀』に記される「須弥山像」のいずれかにあたるとは間違いないと考えられています。

こうした須弥山石は、『日本書紀』斉明6年(660)

5月条で、「高さ廟塔の如し」と記され、その姿は、飛鳥資料館の庭に復原展示した須弥山石に見ることができます。水が噴き出すその様子は、常に動きを見せる珍しい展示物となり、館内展示の須弥山石のイメージをより豊かなものにしています。

(飛鳥資料館 清永 洋平)



須弥山石